

新千載和歌集

卷第三

夏歌

百首歌たてまつりし時、蛩

大納言顯実母

ねにたてずもゆる蛩や思ひせく
心の滝の玉と見ゆらむ

嘉元百首歌めされける次に、同じ心を 後宇多院御製

よるひかる玉とぞみゆる水くらき
あしべの波にまじる蛩は

題しらず

藻壁門院少将

水の面におのが思ひをかつみつつ

影はなれぬやほたるなるらん

康永四年六月仙洞にて三首歌講ぜられける時、
水辺螢といふ事をつこつまつりける

権大納言実夏

せりつみし人の思ひや沢水にもえて
ほたるの影となりけん

題しらず

津守国冬

ながれえの伊勢のはま萩うちそよぎ
涼しき風に飛ぶ螢かな

題しらず

昭訓門院小督

草ふかき露よりしげくとぶ螢
きえぬひかりぞ風にみだるる

卷第十六
雑歌上

惟宗光庭大内記になされて侍りける比、
権大納言公明家にて歌よみ侍りけるに

惟宗光吉朝臣

君が代に心のやみのはれ行くや
窓のほたるの光なるらむ

夏の歌の中に

前大納言実教

いまも猶光なき身のくやしきは
むかしあつめぬ蛩なりけり

「国歌大観」より